

観賞用パイナップルの有望系統の選抜

池宮秀和・永富成紀¹⁾・高原利雄²⁾・出花幸之介¹⁾(沖縄県農業試験場名護支場・¹⁾ 農業生物資源研究所放射線育種場・²⁾ 果樹研究所カンキツ研究部)Hidekazu IKEMIYA, Shigeki NAGATOMI, Toshio TAKAHARA and Konosuke DEGI:
Selection of Ornamental Pineapples

観賞用パイナップルは、ここ15年ほど前から、外国より導入された野生種の *Ananas ananosoides*、または現在栽培されている品種を利用して、切り花用観賞パイナップル、鉢物用観賞パイナップルとして出荷され定着している。沖縄県の観賞用パイナップルの生産は年月が浅く、品種的にバラエティーに乏しい面がある。そこで、観賞用パイナップルとして園芸的価値の高い品種を開発し、市場開拓をしていけば、パイナップルの特性（花の日持ちが長く、鮮やかな色と形態）からして、インパクトの強い商材となりうるもので、今後伸びていくと期待される。今回、放射線照射栄養繁殖系統の中から観賞用として有望な2系統を選抜したので、その特性の概要について報告する。

1. 育成経過

農林水産省農業生物資源研究所放射線育種場（現、独立行政法人農業生物資源研究所放射線育種場）において、1987年にパイナップル栽培品種‘N67-10’および野生種の *Ananas ananosoides* を供試し、その鉢植え植物体をガンマーグリーンハウス内でガンマー線照射した。その照射植物体の葉挿し法により植物体の増殖を行った。その後、沖縄県農業試験場名護支場において、その増殖植物体を縦切り分割法による増殖を行い、その増殖種苗を圃場に定植した。その中から斑入り突然変異植物体を選抜し、葉挿し法による栄養繁殖を繰り返した。2000年には‘N67-10’の斑入り突然変異系統を「沖縄15号」、*Ananas ananosoides* の斑入り突然変異系統を「沖縄16

号」として第3回パイナップル系統適応性検定試験に供試している。

2. 特性の概要

1) ‘N67-10’の斑入り突然変異系統の「沖縄15号」（写真1）は、とげが葉の先端部にわずかに発生する。えい芽の発生はほとんどみられないが、吸芽は1本程度発生する。塊茎芽の発生はみられない。葉は緑、黄色、赤色の縦縞の斑入りで美しく、植物体も原品種の‘N67-10’より小さく、鉢物用観賞パイナップルとして有望である。果実は円筒形を呈し600g程度で原品種より小さい。果皮、果肉はそれぞれ橙黄および黄白色で、果汁の糖、酸含量は原品種とほぼ同等で生食可能である（第1表）。夏実の収穫時期は原品種とほぼ同じ8月頃で中生の系統である。

2) *Ananas ananosoides* の斑入り突然変異系統の「沖縄16号」（写真2）は、原品種の *Ananas ananosoides* と同様とげの発生が多く、果柄が長い。えい芽は1~2本程度、吸芽は3~4本程度、塊茎芽は4本程度発生し、それらの栄養芽の発生数は原品種とほぼ同等である。葉は緑、黄色、赤色の縦縞の斑入りで美しく、切り花用観賞パイナップルとして有望である。果実は円筒形を呈し19gと原品種より小さく、原品種より高糖低酸であるが、生食には適さない。果皮、果肉はそれぞれ白黄および白色である（第1表）。夏実収穫時期は原品種とほぼ同じ6月頃で早生の系統である。



写真1 「沖縄15号」の植物体



写真2 「沖縄16号」の植物体

第1表 観賞用パイナップルの有望系統の夏実における特性

系統名	冠芽	えい芽	吸芽	塊茎芽	とげ	果 実			果 汁		
						果形	果皮色	重さ	糖度 ^{a)}	酸度 ^{a)}	糖酸比
沖縄15号	1.0本	0.007本	1.1本	0.0本	微	円筒	橙黄	623 g	14.2%	0.67%	21.19
沖縄16号	1.1	1.5	3.6	3.8	多	円筒	白黄	19	8.6	0.68	12.65
N67-10	1.0	1.3	1.3	0.0	微	円筒	橙黄	1380	13.8	0.65	21.23
<i>Ananas ananosoides</i>	1.0	1.9	3.1	4.0	多	円筒	白黄	42	6.1	0.80	7.63

注) ^{a)} 糖度、酸度は日園連酸糖度分析装置により測定